優 秀 賞

「　大人になりつつある私が、いま図書館に行くべき理由　」

経済学科　2年　錯多あわ（P.N.）

子どもの頃の私にとって、図書館は大きな宇宙だった。背丈が小さかったからなのか、日常とかけ離れた空間だったからなのか。明確な理由は分からないままだが、子どもの頃に見ていたそれは、かなり大きな存在に思えた。

小学校の昼休み、同級生が一目散に運動場へ走るのを横目に私は図書館へ足繁く通った。誰にも邪魔されない、紙が擦れる音だけの空間が、私を少しだけ「大人」な気分にさせてくれたように思う。たくさん本を読む度に、当然夢は大きく膨らんだ。

ところが、成長するにつれて大多数の「大人」が大きな夢を抱かないことに気づく。私もまるで大人になるための通過儀礼のように、夢を捨てるようになった。その代わり、周りから浮かないようにその年相応に見えるような目標を持った。中学に上がれば、受験に役立てるためだけに英検や漢検を受け、高校では大学受験を早く終わらせるためだけに学級委員をやった。大学に入学してもそのスタンスは変わらず、周囲に後れを取らないように運転免許を取り、単位を取るためだけに授業に出るようになった。目まぐるしい毎日の中で、私は図書館に行かなくなった。

そんな私が何故、いま図書館に行くべきだと感じるのか。それは、大人になれると思っていた空間が、いつのまにか子どものように夢中になれる場所になっていたことに最近気づいたからである。あんなに早く大人になりたかったのに、今ではあの頃に戻りたいと思うことの方が多くなってしまった。その事実には漠然とした恐怖すらあるが、それでも私はもう子どもに戻ることはできない。未来への選択を目前に、私は大人にならなければならない。だからこそいま行くべきなのだ。あの頃純粋に抱いた未来への期待を失ってしまう前に。夢中になれる場所をずっと持っていたいのだ。子どもには戻れないけれど、子どものように夢中になれないわけではないと思う。

私は今日もまた、あの頃の私に会いに図書館へ行く。